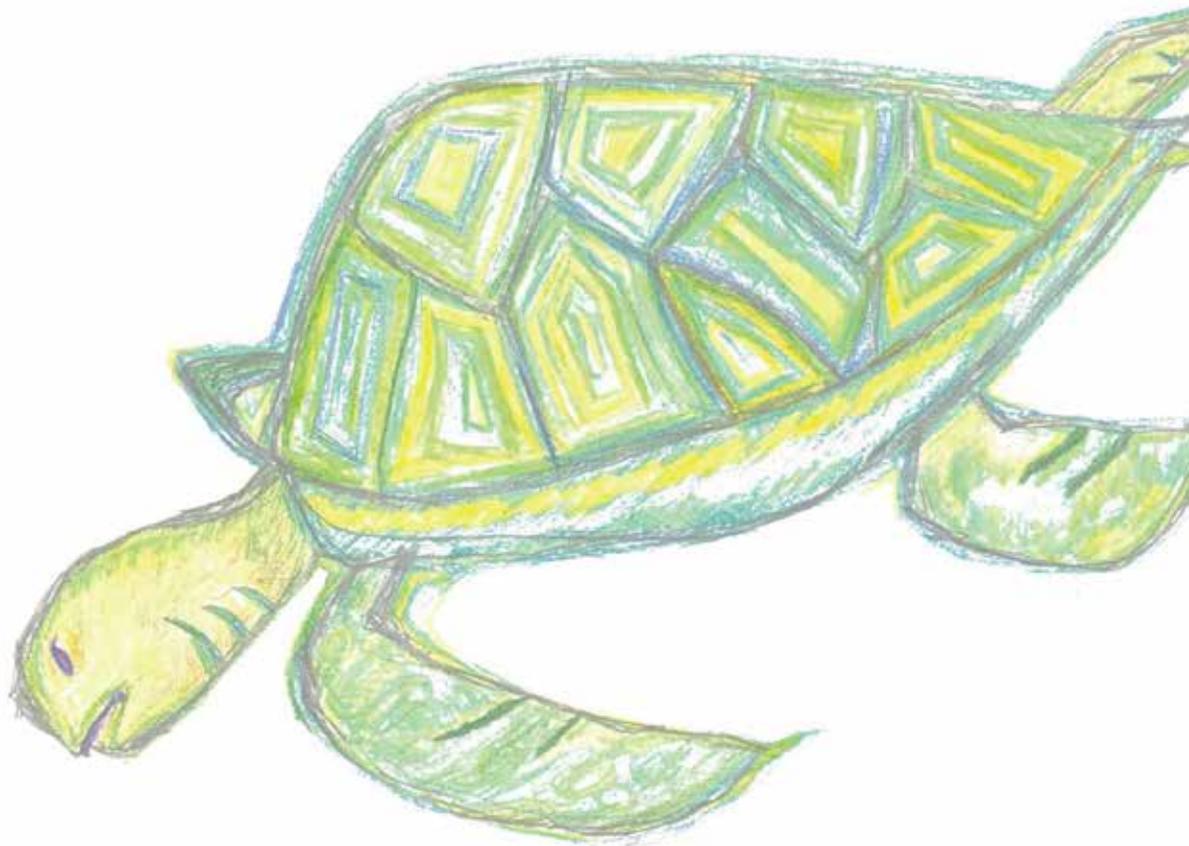
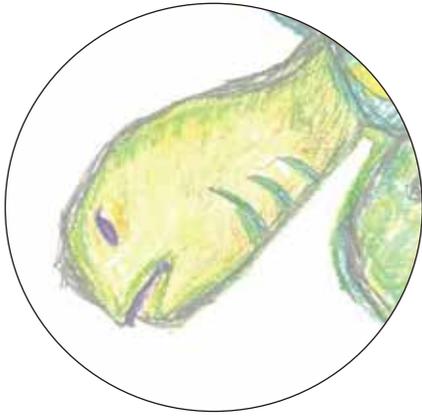


Marine Turtler

マリンタートラー

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌
第34号





表紙の絵
濱崎 清一 様

絵とともにいただいたコメント：

全ての生き物が共存できる地球にしていきたい。人間本位の考え方はしない。

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ : B5
- 色 : カラー (30号よりカラーでの掲載となりました!)
- 期限 : ヲ切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法 : 大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先 : 〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

マリントートルーとは

会報の名称マリン・タートルー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルーと呼ぶことを提唱したいと思います。

Marine Turtler

Contents

ウミガメ研究最前線6	沖縄のウミガメはあまり人工物を食べていない 笹井 隆秀	2P
事務局だより	最近トート、使っとーと？ 松宮 賢佑	5P
水族館とウミガメ7	第34回日本ウミガメ会議 名古屋港水族館とウミガメ 栗田 正徳	6P
もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪	伊佐則男さん 若月 元樹	8P
各地からの報告	ウミガメに拘って今 田端 重夫	10P
	ナメクジウオとの出会い 中西 悠	12P
	25mプールを活用したウミガメの実験 杉浦 功輝	14P
ウミガメ会議を終えて	27年前の一本の電話 米須 邦雄	15P
新人紹介	むろと廃校水族館 山口 智也	16P

沖縄のウミガメはあまり人工物を食べていない ～ 29 年分の死亡漂着個体データを解析～

沖縄美ら島財団 水族館管理部海獣課 笹井隆秀

海洋に流出した人工物は、多くの海洋動物に影響を与えることが知られており、世界的な問題となっている (Gall and Thompson, 2015)。ウミガメでも、人工物を誤って摂食すると、消化器官の穿孔や閉塞、栄養吸収効率の低下、有害物質の体内吸収などの問題があり、生存や成長を妨げる可能性が指摘されている (Schuyler et al. 2012 ; McCauley and Bjorndal, 1999)。

ウミガメの人工物摂食の程度は、本州や八重山諸島で研究されているが、沖縄本島周辺の記録なく、状況は不明であった。そこで、沖縄美ら島財団が長いこと取り貯めてきたデータを解析して、沖縄本島周辺に死亡漂着したウミガメがどの程度人工物を摂食しているのかを調べた。1990 年 10 月から 2019 年 7 月の間に、沖縄本島およびその周辺離島の海岸に漂着したウミガメのうち、消化管の様子を確認できたアオウミガメ 383 個体、タイマイ 63 個体、アカウミガメ 38 個体を対象とした。これらの標準甲長 (SCL) の平均値は、アオウミガメで 572.2mm (範囲 : 309-1020mm)、タイマイで 424.1 (201-800mm)、アカウミガメで 821.0mm (655-955mm) であった。消化管内容物から得られた人工物は、Fukuoka et al. (2016) に倣って、ハードプラスチック、ソフトプラスチック、発泡スチロール、釣り糸・ロープ、釣り針、ゴム、その他に分類した。



データを取りまとめたところ、消化管内から人工物が見つかった個体の割合は全体の 17.4% (84 個体) だった。種別で見ると、アオウミガメで 14.9%、タイマイで 28.6%、アカウミガメで 23.7% であった。出現した人工物の種類は、アオウミガメでは軟質プラスチック (54.4%) と釣り糸・ロープ (36.8%)、タイマイでは硬質プラスチック (44.4%) と軟質プラスチック (33.3%)、アカウミガメでは硬質プラスチック (44.4%) と発泡スチロール (33.3%) が多かった。



日本各地で行われたアオウミガメの人工物の摂食頻度に関する先行研究では、日本海と岩手沿岸で 100%、四国・紀伊で 52.3%と高い割合であったが、八重山諸島は 2.8%と極めて低い値となっている（亀田・石原 2009；福岡ら 2016）。沖縄本島のアオウミガメの 14.9%は、八重山諸島の値に近いことがわかる。そして、アオウミガメの人工物の摂食頻度は、沖縄島や八重山諸島周辺を含む南方地域では低く、日本の主要な島々を含む北方地域では高いということが明らかになりました。では、このような地域間の違いは、何に起因するのだろうか。



岩手沿岸で発見されるアオウミガメは、季節的に数百キロ移動することが知られており（Fukuoka et al.2015）、この長距離移動中に人工物を水面付近のゼラチン質の餌と混同することが知られている（Fukuoka et al.2016）。これに対し、八重山諸島周辺のアオウミガメは、餌場と近隣の休憩場所との間の狭い範囲しか移動しないと言われている（Okuyama et al.2013）。亀田ら（2013）の調査においても、採餌期間中の

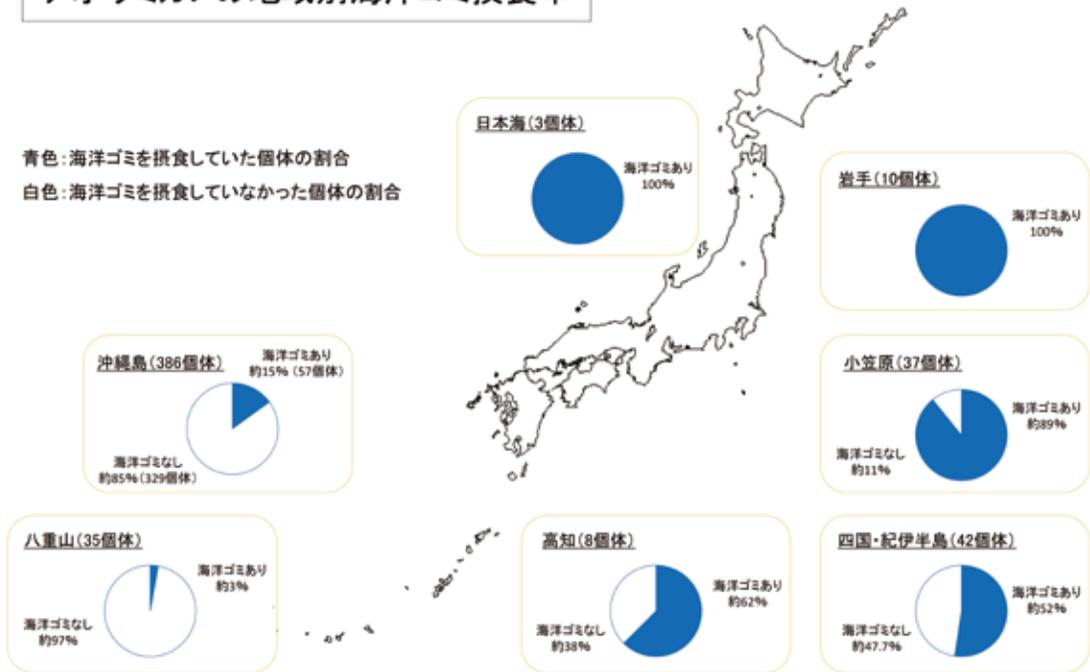


アオウミガメは約 16.3km² の狭い範囲に定着することが報告されている。沖縄島では、東海岸と西海岸の間で移動するなど、八重山諸島よりは少し長い距離を移動している（Hayashi and Nishizawa 2015; Nakanishi et al.2017）。これらのことから、アオウミガメについては、外洋を移動することが、人工物の遭遇率や摂食率に影響を与えていると考えられた。

一方で、アカウミガメは少し話が異なる。Fukuoka et al.（2016）は、岩手沿岸で発見された 13 頭のアカウミガメのうち、11 頭（84.6%）が人工物を摂食していたと報告している。一方、沖縄諸島のアカウミガメでは、23.7% のみであった。この人工物の出現率の違いは、アカウミガメの性成熟度と食欲の違いによって説明できるかもしれない。成熟したウミガメは、繁殖期になると食物摂取量が減少することが知られている（Bjorndal 1985）。産卵地域である沖縄沿岸で捕獲されたアカウミガメはほとんどが成熟しているのに対し（Kawazu et al.2013）、採餌地域とされる岩手沿岸のアカウミガメは未成熟とされている（Fukuoka et al.2016）。これらのことから、アカウミガメの人工物の摂食頻度は、性成熟に関係する食欲によって左右される可能性が示唆された。

アオウミガメの地域別海洋ゴミ摂食率

青色: 海洋ゴミを摂食していた個体の割合
 白色: 海洋ゴミを摂食していなかった個体の割合



引用文献: 亀崎(1994); 田中・岩瀬(2005); 亀田・石原(2009); Fukuoka et al. (2016); Sasai et al. (2021)

Bjorndal, K.A. 1985. Nutritional ecology of sea turtles. *Copeia* 1985: 736-751.

Fukuoka, T., T. Narazaki and K. Sato. 2015. Summer- restricted migration of green turtles *Chelonia mydas* to a temperate habitat of the northwest Pacific Ocean. *Endangered Species Research* 28: 1-10.

Fukuoka, T., M. Yamane, C. Kinoshita, T. Narazaki, G. J. Marshall, K. J. Abernathy, N. Miyazaki and K. Sato. 2016. The feeding habit of sea turtles influences their reaction to artificial marine debris. *Scientific Reports* 6: 28015.

Gall, S.C. and R. C. Thompson. 2015. The impact of marine debris on marine life. *Marine Pollution Bulletin* 92: 170-179.

Hayashi, R. and H. Nishizawa. 2015. Body size distribution demonstrates flexible habitat shift of green turtle (*Chelonia mydas*). *Global Ecology and Conservation* 3: 115-120.

亀田和成・石原孝. 2009. 日本沿岸におけるアオウミガメの消化管内容物. *うみがめニュースレター* (81): 17-23.

亀田和成・若月元樹・亀崎直樹. 2013. 八重山諸島黒島の摂餌海域におけるアオウミガメの個体群構造と成長速度. *沖縄生物学会誌* 51: 93-100.

Kawazu, I., K. Maeda, M. Kino and S. Oka. 2013. Structure of the loggerhead turtle assemblage in Okinawan waters estimated from variation in body size and blood profile. *Current Herpetology* 32: 190-196.

Mccauley, S.J. and K. A. Bjorndal. 1999. Conservation implications of dietary dilution from debris ingestion: sublethal effects in post-hatchling loggerhead sea turtles. *Conservation Biology* 13: 925-929.

Okuyama, J., K. Nakajima, T. Noda, S. Kimura, H. Kamihata, M. Kobayashi, N. Arai, S. Kagawa, Y. Kawabata and H. Yamada. 2013. Ethogram of immature green turtles: behavioral strategies for somatic growth in large marine herbivores. *PLoS ONE* 8(6): e65783.

Schuyler, Q., B.D. Hardesty, C. Wilcox and K. Townsend. 2012. To eat or not to eat? Debris selectivity by marine turtles. *PLoS ONE* 7(7): e40884.

Wilcox, C., M. Puckridge, Q. A. Schuyler, K. Townsend and B. D. Hardesty. 2018. A quantitative analysis linking sea turtle mortality and plastic debris ingestion. *Scientific reports* 8: 1-11.

最近トート、使っとーと？

大阪事務局 松宮 賢佑

ウミガメ好きの皆さま、気付くとウミガメグッズが周りに増えていく皆さま、アオウミガメファンの皆さま、日本ウミガメ協議会にはネットショップがあるのをご存じでしょうか？

ネットショップでは、協議会のオリジナルグッズだけでなく、数量限定で日本ウミガメ会議の記念グッズも取り扱っています。昨年12月に開催した第33回日本ウミガメ会議やんばる大会では、記念グッズとしてトートバックを作成しました。「あれ、今年のTシャツは？」もしそう思われた方がいらっしゃれば、その方はきっとウミガメ歴が長い方もかもしれません（笑）。

実は、当会の事務局長は無類のTシャツ好きであり、気付くとウミガメグッズが増えていくタイプの人なのです。そんな事務局長たっでの希望で、日本ウミガメ会議では記念Tシャツの製作が恒例となっていました。しかし、事務局長の会議Tシャツコレクションも気がつけば10種類を超えたようで、今回は新たな日常使いグッズを考案することになりました。どんなものが良いかを考えていたところ、とある人の関西人らしからぬダジャレをきっかけに、みんなの頭から「とーと」が離れなくなり、今回はトートバックを製作するに至りました。

トートバックは今大会の開催地であるやんばるらしさを感じる、アオウミガメの背中にヤンバルクイナが乗ったかわいらしいデザインです。普段使いにも、会議の記念にも、そしてもちろん調査にも使えます。フィールドワークにも耐えられるよう生地も丈夫です。

ちょっとお聞きますが、最近トート、使っとーと？

会議の記念グッズは数量が限られていますので、気になった方はお早めに日本ウミガメ協議会のネットショップをチェックしてみてくださいね。



第 34 回日本ウミガメ会議 名古屋港水族館とウミガメ

名古屋港水族館 館長 栗田 正徳

皆さん、こんにちは。次回、ウミガメ会議を名古屋港水族館で開催することとなりました。

沢山の皆様をお迎えすることになると思いますが、名古屋港水族館のことをあまり知らないあなたに、私たちの水族館のことを紹介します。

名古屋港水族館は、1992年に「南極への旅」を展示テーマに、開館しました（現、南館）。日本の海から南極まで、様々な環境の水域に適応した生物たちを展示しています。2001年には2期工事として隣接して北館をオープンさせました。「35億年はるかなる旅～ふたたび海へもどった動物たち～」をテーマとしてシャチ、シロイルカなどの鯨類を飼育しています。

南館では現在の地球を旅してもらいますが、北館では生物の進化を感じてもらい、いわば、時間の旅をしてもらおうというコンセプトです。北館と南館をあわせると、展示水量は とんと、日本で最大です。初代館長の内田至博士がウミガメの研究をしていたことから、開館以来ウミガメ類の飼育と繁殖にも力を入れてきました。これまでにアカウミガメ、タイマイ、アオウミガメの室内環境での繁殖に成功しています。

ウミガメをよく知る皆さんは、日本で生まれたアカウミガメがカルフォルニア半島沖まで成長回遊することはご存じでしょう。私たちはアメリカ海洋大気庁と2003年から約10年間、名古屋港水族館で生まれたアカウミガメにアルゴス送信機を散りつけて日本近海やハワイの北方沖から放流を行いどのような経路をたどって回遊するか調べました。その結果、予想に反して、カルフォルニア半島に向かう個体はそれほど多くはありませんでした。



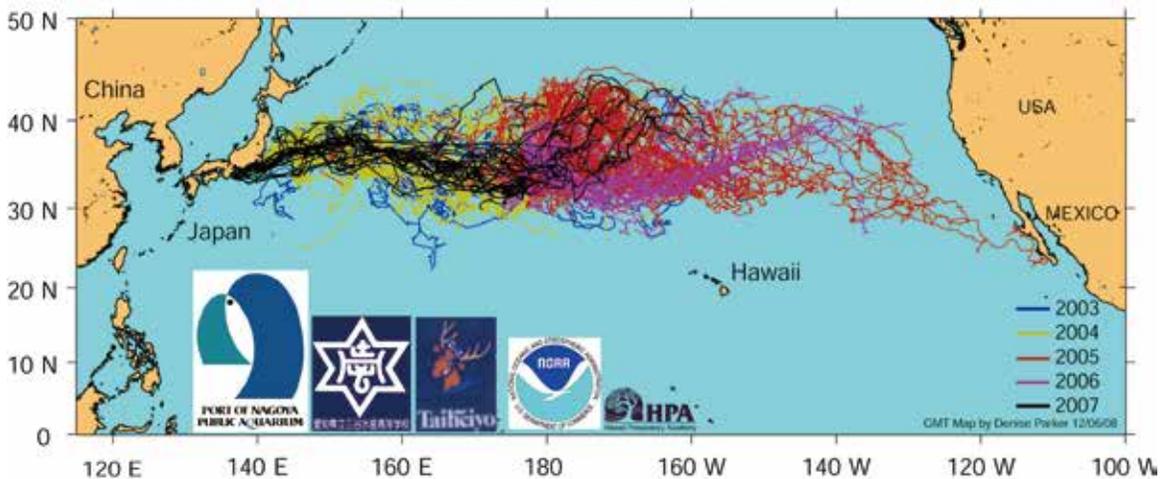
外観

冷たい海域、東太平洋の大障壁がウミガメたちの行く手を阻んでいるのです。それでも、たくさんアカウミガメたちがカルフォルニア半島近くの豊かな海で成長しています。私たちは、この謎に挑むために、今年から、日本、アメリカ、メキシコ、ニュージーランドの研究者たちと共に名古屋港水族館で育てた亜成体のアカウミガメに送信機を取り付けて、大障壁をアカウミガメたちがどうやって超えていくのか解明しようと5年計画で再チャレンジしています。この原稿を書いている段階ではまだ放流を始めていませんが、大会が行われる頃には、1回目の放流が終わっているでしょう。みなさんに途中経過を報告できるといいのですが、乞うご期待。

名古屋港水族館でお待ちしています。



2003-2008 Satellite tracking of pelagic loggerhead turtles



伊佐 則男さん

むろと廃校水族館 若月 元樹

縄県那覇市の古いビルの2階に『苦屋』（とまや）という大将が1人で切り盛りする小さな店があります。知る人ぞ知る刺身が旨い居酒屋です。かつて、この店では生け簀にアオウミガメが泳ぎ、同居するイセエビ同様、店内の看板メニューでした。

私がこの店を知ったのは脱サラして大学院に通っていた頃。魚市場で働いていた後輩から「ウミガメを仕入れている店があります」と教えられ、その後輩と確認がてら食べに行っただけでした。『苦屋』にメニューは無く、強面の大将が客の雰囲気刺身を盛り付けるというスタイル。若い我々に対し、豪勢な刺身の盛り合わせが出てきたものの、美味しく味わえませんでした。支払いがとんでもないことになるのではないかと心配だったのです。「学生になった先輩には払わせません」、「後輩に支払わせるわけあるか」とヒソヒソとしゃべっていたのが聞こえたのか、驚きの格安価格にしてくれました。

当時、那覇市内でアオウミガメをメニューに出す店はいくつもありました。しかし、次々とメニューや店自体が姿を消す中、『苦屋』だけが残りました。このお店は1947年生まれの店主、伊佐則男さんが30歳の時に脱サラして開店。なんと、どこかの店で修業したとかは一切無く、魚のさばき方は仕入れ先の魚屋から学んだそうです。アオウミガメの調理は自己流。「倉田先生※に教えてもらって以降、足も調理するようになった」と言います。アオウミガメをさばいた頃にお店に行くときよく血で割った泡盛を飲まされました。子どもが出来ないと悩んでいた男性客に飲ませたら、後日「子どもが出来ました」とのうれしい報告をもらったことがあると言うエピソードも。



私が最初に店に顔を出した頃の伊佐さんはちょい怖オヤジでした。客が恐縮しながら食べることも有名なお店でしたが、今では優しいオジーになりました。以前、優しくなった理由を聞いたら、「客に自分のコンプレックスをぶつけるのをやめた」とのこと。優しくはなりましたが、伊佐さんのクセの強さは健在です。料理同様、伊佐さんの存在自体が『苦屋』の魅力のひとつとなっています。

現在はアオウミガメを出していません。「店内の生け簀が水漏れするようになったから」という、これまた衝撃の理由でした。今後復活するかは未定ですが、沢山のアオウミガメをさばいてきた伊佐さんはベテラン亀屋。今後もベテラン亀屋、伊佐さんのお話を聞きにお店に顔を出したいと思います。



ウミガメに拘って今

いであ株式会社沖縄支社 田端 重夫

44年前に御前崎でアカウミガメの産卵を見て以来、しばらくウミガメとの縁がなく、仔稚魚、プランクトンに係る業務をしていました。その中で、希少生物の保全、保護に係る調査や飼育研究に多く携わるようになり、25年前の平成11年にタイマイを国内で増やす計画策定業務をきっかけとして、ウミガメにどっぷりハマることになりました。当時の勤務地であった静岡と沖縄を月2回は往復し、オーストラリアのWebb博士の施設視察など出張だらけであったため、経費節減から社長命令で沖縄転勤となり、現在に至ります。アメリカの同時多発テロの時は松沢会長とキューバ、ケイマンに行きました。

沖縄転勤後は、空港や港湾、海岸道路整備の環境アセスメント業務が増えました。ある事業の委員会で亀崎前会長と接したのをきっかけにウミガメ協議会に入会させていただきました。亀崎前会長には「コンサルは勝手に情報だけ持っていくから嫌なんや・・」と言われ、全国のボランティアの方々のご苦労を真摯に受け、データの裏側にある「想い」を改めて感じました。今では老若男女の研究者と非常に有意義な交流をさせていただいています。

私のウミガメに関する2つの主な業務の概要を記します。

まずは、タイマイ飼育についてです。沖縄美ら海水族館、名古屋港水族館、水産庁南海区水産研究所（現、国立研究開発法人水産・教育研究機構水産技術研究所）、日本ウミガメ協議会が平成11年度からそれぞれの組織、施設に相応した研究をされてきました。これらの機関の研究成果を基に、現在も技術指導や協力をいただきながら415頭を飼育管理しています。平成16年に天然親同士の最初の産卵ふ化がみられ、その仔ガメ同士が14年後の平成30年に産卵し、孫世代として育てています。メスは8年で卵胞を持つのもみられますが、オスの成熟が遅く、14年を要しました。また、最近のヒトと同じなのかオスが弱く、メスにマウンティングしてもすぐに跳ね返されています（笑）。タイマイの繁殖行動はまだ未解明な部分も多いのですが、毎年産卵があり、仔ガメが生まれていることに希望を感じ、これからも挑戦し続けます。



飼育施設



タイマイ（H25年度）



タイマイ（R4年度）

次に、アオウミガメと海草の問題です。先日のウミガメ会議でも奥山準一さんがポスター発表されていましたが、亀崎前会長さんも言及されていました。西表島において、アオウミガメと同等の絶滅危惧Ⅱ類にランクされる海草類ウミシヨウブが最近増えてきているアオウミガメに採食され、網取湾ではほぼ絶滅しました。アオウミガメの増加は、保護意識の高まりとウミガメを食べる習慣が低下したことが主因とされています。一方、ウミシヨウブは国内で石垣島、西表島にのみ生育しており、世界的にみると分布の北限にあたります。ウミシヨウブ等が形成する海草藻場は、アオリイカの産卵場やアイゴやフエフキダイ類稚魚のゆりかご（生育場）です。また、そのほか多くの魚類や底生生物が生息しているほか、CO₂の固定場としてのカーボンオフセットに重要であることが分かってきました。そのため、アオウミガメの保護は少し横に置いて、その「生態系」を考えるとウミシヨウブ、藻場の回復が急務です。そこで、網取湾の隣の崎山湾に辛うじて残存しているウミシヨウブ群落の周囲を囲むようにアオウミガメ侵入防止柵を3年前から設営しました。防止策の中のウミシヨウブは葉の伸長し、対策の効果が認められました。漁業者や海洋レジャー関係者とも調整しながら、近々にはさらに拡大する計画を策定しています。一方で、アオウミガメの動向が気になります。食べるウミシヨウブが目前にあるのに食べられないとなると他の海域の海草藻場に来遊することが懸念されます。実際、久米島での大量捕獲や糸満の藻場での確認頻度が高くなっているように思います。今後は、アオウミガメとの共生バランスを考えていく必要があり、協議会のみなさんのご意見や名案を御指導いただけたら幸いです。



アオウミガメ侵入防止柵(12m×12m)



防止柵周辺:海草葉体がほとんどない



防止柵内:アイゴ(TL15cm)が採食



柵内の海草を食べたいけど無理(怒)

ナメクジウオとの出会い

黒島研究所 中西 悠

皆さんはナメクジウオという生き物をご存じでしょうか。海の砂地に住み柳の葉のような形で、数センチほどの小さな生き物です。見た目も名前からも魚の一種のような印象を持ちますが、魚とは全く異なるグループの生き物です。口には顎がなく、代わりに触手があります。眼もありません。ただし、人間も魚もナメクジウオも脊索動物という大きなグループに含まれます。これは、体をとる一本の軸（脊索）を持つ共通した特徴があるためです。遺伝的な研究からもナメクジウオが人間の祖先的な生き物と言われています。地域によってはナメクジウオの生息地が天然記念物に指定されていたり。生物好きなマニアックな人であれば名前を知っている、というぐらいの生き物です。

先日、ナメクジウオの一種であるオナガナメクジウオを採集したいというメールが来ました。ナメクジウオの進化や発生の研究をされている島根大学隠岐臨海実験所の小野廣記先生という方です。日ごろは島根県の北にある隠岐の島という離島で研究をされています。隠岐の島は神話「因幡の白兔」の舞台になっていたり、釣りの名所としても有名で、人口は13,000人ほどだそうです。



オナガナメクジウオ

実は、このオナガナメクジウオ。黒島にも当研究所の先代が90年代に黒島で採集したという報告がありますが、それ以降、国内に採集記録がないそうです。それで、私たちの研究所に連絡したとのことでした。採集マニアな上司も、15年ほど前に採集したことがありました。まだいるのかチェックしたいという上司に連れられ、小野先生らとともに探しにいきました。

場所はいつも私も泳いでいるような浅い砂地です。そこで潜って表層部分の砂を取って小野先生の待つ浅瀬まで持っていきます。その砂をトレーの上に少しずつ広げていきます。見たところサラサラの砂で藻とかゴミとかですらあまりなく生き物の気配なんて感じられません。出会えるまでどれくらい砂を取らなければならないのだろうと思っていたら、探し始めてすぐに先生から「あ！いた！」と歓声が上がりました。スポイトでくみ上げてサンプル瓶に移したところを見せてもらったら、切った爪

の先を伸ばしたような1cmほどで半透明の棒がいます。でも、確かに泳いでいます。

慣れてくると私にもトレーの砂にいるオナガナメクジウオが見えるようになります。その後もどんどん砂の中からでてきました。小野先生は、今までオナガナメクジウオを探すのに相当苦勞されていたらしく、とても嬉しそうです。先生を見ていると、こちらまでナメクジウオを探すのが楽しくなります。本当の研究者とはこういう人なのでしょう。帰ったら即祝杯でした。宴席の中で、隠岐の島のことや海外にナメクジウオ調査をしたときの思い出などをお聞きしました。

今後は砂を見るたびに思い出すことでしょうか。このマニアックな動物の魅力はなかなか一般に伝えにくいと思うのですが、飼育は簡単らしいので、いつか研究所の片隅で飼われているかもしれません。



小野先生と砂の中のナメクジウオを必死に探しているところ

25m プールを活用したウミガメの実験

むろと廃校水族館 杉浦 功輝

むろと廃校水族館は 2018 年にオープンした水族館です。その名の通り廃校を活用した水族館であり、教室や跳び箱など前身である“学校”の特徴を活かした展示を行っています。そして当館の最大水槽は屋外にある 25m プール。子どもたちが泳いだプールに、現在はウミガメをはじめブリやサメなど数多くの生き物たちが泳いでいます。

昨年 11 月、東京大学大気海洋研究所の坂本健太郎准教授らが、この 25m プールで 2 つの実験を実施しました。1 つ目はアカウミガメが餌を食べる様子を観察する実験です。ウミガメの甲らにビデオカメラを装着した調査で、アカウミガメがクラゲを食べる様子がしばしば観察されています。そのクラゲを識別し、クラゲを食べる時のみ撮影するカメラを開発する実験をしました。2 つ目はアカウミガメの心拍変化を観察する実験です。それぞれウミガメにビデオカメラと心電図・加速度ロガーを装着して、プールに入れました。



カメラロガーを装着したアカウミガメ

今回の実験は、海での実験をする前の予行練習です。当館の 25m プールは元々小学生用で、ウミガメが自由に泳げる広さがあり、水深が浅いためにウミガメや機器の様子を観察するのに最適です。1 つ目の実験では、クラゲを食べる時の行動に近づけられるように、浮きやすい餌を使用したり、浮いている餌に興味を持ったウミガメにカメラロガーを装着してみたり、飼育個体ならではの様々な方法で実験ができました。2 つ目の実験では、ウミガメの静止、遊泳、潜水などの行動が確認しやすく、心拍数と行動観察の情報を比較することができました。



心電図計を装着したアカウミガメ

かつて子どもたちの歓声が響いたプールで、研究者の歓声が響く実験ができました。今後も多くの研究の場として利用されることを望みます。

27年前の一本の電話

沖縄県大宜味村 米須 邦雄

27年前の1996年6月3日当時大宜味村教育委員会の文化財を担当していた私に村民から電話が入った。根路銘の浜でウミガメの卵が盗まれている、とのことであった。現場に行ってみると確かにウミガメの足跡があり、浜の上部には砂が盛り上がり掘られたりしているところがあった。その時は掘られた場所から卵が盗まれたと勝手に思っていた。小学生の頃にウミガメを食べたことがあり、ウミガメは近い存在であったのだが、ウミガメの産卵痕跡を見るのは初めてであった。しばらくその砂浜を歩いていると数ヶ所に同じような痕跡があったので盗掘ではないと考え、ウミガメの生態を知らないままに一か所を素手で掘ってみた。長さ3m余、幅1m余の範囲を1時間ほどですべて掘り返したのだが卵は見つからなかった。意地になってもう一回掘り返してみると途中で周辺とは違う柔らかい部分を発見して深く掘ると卵があり、すべてを掘り出すと120個ほどあった。その日からウミガメにはまってしまった。



翌日から仕事を終わると10か所ほどの砂浜を歩く日常になった。そして年配の方からウミガメの話聞いた。「昔はウミガメの卵を探すのに棒で突いていた。卵があるところは感触が違う」と聞いたので最初は園芸用の細い支柱を使って卵を確認していたが、使っているうちに掌が痛くなったので良い方法を考えてみた。翌年から金属の細い棒の上部に木製の取っ手をつけると効率が良くなった。そのうちに産卵痕跡のどの部分に産卵しているかもだいたいわかってきた。同時に産卵間隔も予想できたので、2~3日前から砂浜で張り込み、産卵の現場も幾度か観察することができた。そして孵化（脱出）も観察でき、浜での新たな「感動」にすっかりはまり込んでしまい、浜で朝を迎えることも多くなってきた。この「感動」を他の人にも経験して貰いたいと思い、多くの人に呼び掛けて「産卵」「孵化（脱出）」観察会等も行った。数年後には多くの村民に認知されることになり子ども達からは「かめ仙人」「かめキチガイ」などと呼ばれ、大宜味村の浜でのウミガメの産卵、孵化（脱出）は、多くの人たちに知られることになっていった。



むろと廃校水族館 山口 智也

幼い頃から動物が大好きで、ずっと動物に関わる仕事がしたいと思っていました。中学生の時、動物を助ける仕事がしたいなと思うようになり、当初は動物を助ける仕事なら獣医かな、とあまり深く考えずに獣医を目指していました。そして高校卒業後、一度は生命科学系の大学に進学したのですが、その後、関西の専門学校へ入学しました。

この専門学生時代に、和歌山県みなべ町にある千里浜でのアカウミガメ産卵調査の研修に参加しました。この研修がウミガメに興味を持ちはじめたきっかけです。家でアカウミガメを飼育していて、その影響でカメが好きになっていたこともあり、ウミガメの魅力にもどんどんハマっていき、次第にウミガメの保護や調査に携わる仕事がしたいと思うようになりました。専門学校を卒業後、アルバイトを続けながら就職活動していたところウミガメ協議会の募集を見つけ、ウミガメ協議会の運営するむろと廃校水族館のスタッフとして現在働いています。

最初は全然分からないことだらけで勉強の日々でした。ウミガメに関われるとはいえ、水族館での仕事が自分に向いているのかという葛藤は今でもあります。周りの方々にご迷惑をおかけすることもたくさんあります。コミュニケーションが苦手な私にも優しく接して下さる先輩方のおかげで、少しずつですが出来ることも増えたように感じます。これからも自分に出来る事を増やしていき、ウミガメに関わる人たちの力になれるよう成長していきたいと思います。



Seaturtle Goods Shop

ウミガメに関する商品を販売しています。

オリジナル商品も多数ございますので、ぜひご覧ください!!!

Seaturtle Goods Shop →



Tシャツ



ウミガメストラップ



てぬぐい

Twitter・Facebook



Twitter・Facebook もやっています。

各地の近況お届けします!



むろと廃校水族館 Twitter



黒島研究所 Twitter



大阪事務局 Twitter



大阪事務局 Facebook



STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。

皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。



入会金：なし

年会費：個人会員3,000円、団体会員10,000円、

特別会員100,000円

会員特典：オリジナル会員証&グッズ、ウミガメ速報の配信、機関誌
(マリンタートラー)のお届け



詳しくはコチラ!



ご寄付を頂いた方々

シャディ(株)、パブリックリソースセンター、ヤフービジネスサービス、南知多ビーチランド、コココーラボトラーズ(道の駅日和佐かめたろう)、細野 広美、片山 素美、和田 素子、白崎 野百合、串本海中公園センター、太田 英利、池田 とし子、ゴルティアノ マリアローテ、前田 直美、清水 すみゑ、清水 恭子、永森 耕二、豊島(株)、秋山 秀子、ケイ カール、伊東 沙矢香、松井 久実、古戸 燦、小嶋 絵美、太平電気(株)(エコひいきプロジェクト)、奥田 恭子、杉田 菜央、上田 紗奈江、坂東 武治、福原 富士美、板橋第三中学校、ニチレイマグネット(株)、ダイドードリンコ(株)、黒田 彩子、ライオン(株)、(株)ヤマト、小谷野 徹。(敬称略、寄付を頂いた日付順)

そして、みなべ基地、黒島研究所、むろと廃校水族館へのご寄附&差し入れを頂いた方々。



編集後記

まずはじめに発行が遅くなり申し訳ありませんでした。

黒島研究所にもコロナ期間中は少なくなっていた入館者や修学旅行が戻ってまいりました。コロナ以来3年ぶりの来館ですとおっしゃる方もちらほら見られ、とてもうれしい限りです。年々建物の外装はボロボロになってますが、室内の展示はどんどん新しくしておりますのでぜひ気が向いた時にでもウミガメたちを観にお越しください。

黒島研究所：中西 悠



マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2023年 3月 1日

発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535

URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org